

(平成21年1月1日)

○平和が丘学区連絡協議会

○平和が丘学区地震対策委員会

安否確認 ⇒ 行方不明者 ゼロ !

石川県輪島市の場合

役に立った

【高齢者マップ】

平成十九年三月の能登半島地震。震度6強を記録した輪島市門前町では全壊五一三戸、半壊一、〇八六戸という大きな被害を受けながら、地震から約四時間二十分後には六百八十三人の災害時要援護者全員の状況が確認されていた。そこには、町独自に作っていた「高齢者者マップ」の力があつた。

健康福祉課長のアイデア

マップ作製のきっかけは、平成七年の阪神・淡路大地震で相次いだ高齢者の孤独死だった。

石川県は同年、全市町村に高齢者など「災害時要援護者マップ」の作成を推進。県は、六十五歳以上の「独り暮らし」「夫婦のみ」などの家族構成を○や△などの記号で分けるといったものだったが、当時、輪島市と合併する前の門前町健康福祉課長だった佐藤千賀子さん(当時五九)は「一目で分かるように」と、地図上の各戸を生活状況に応じて色分けすることにした。

「寝たきり」はピンク、「独り暮らし」は黄色、「夫婦」は緑。他に「障がい者世帯」は青に。マップは毎年一回、民生児童委員が

地域の状況を調査してデータを更新、精度を上げている。その対象者は、町内の高齢者約三千七百人にのぼる。

マップは三者が共有

さらに、このマップを有効に使うため、町と社会福祉協議会、民生児童委員の三者が同じマップを持っている。

三月二十五日の地震発生直後、輪島市門前総合支所は民生児童委員らに、災害時有線電話を使って高齢者の安否確認を依頼。民生児童委員らはこのマップを手に戸別訪問。体調や家屋の損壊程度を確認したりしながら、避難所への避難誘導にも努めた。

こうして、地震から四時間二十分後の午後二時には全員の把握ができた。

民生児童委員の一人(当時六五)は「普段から頭の中では高齢者を把握しているつもりだが、今回のような緊急時には、マップがあつて本当に良かった。安心して調査や誘導に回ることができたと喜んでいた。」



巨大地震で自宅の被害は ? ネットで手軽に予測できます

どうぞ、愛知県の「防災学習システム」にアクセスしてください !

システムのアドレスは <http://www.quake-learning.pref.aichi.jp/> です

東海地震と東南海地震という巨大地震が連動して発生した場合、自宅は大丈夫だろうか。愛知県のホームページにある「防災学習システム」を使えば、住所地の地盤がどうなるかの予測と、揺れによる木造住宅の状況について、手軽に想定実験ができる。一度、確かめてみてはいかがでしょうか。

このシステムには①住所地の想定震度や液化化など、地盤の様子が分かる「防災マップ」②木造2階建て住宅の揺れ方が分かる「建物倒壊シミュレータ」③地域の防災地図④防災に関するビデオ教材：が組み込まれ、それぞれの画面の指示に従って進むと様々な情報が得られる。

システムは県独自の被害予測と、名古屋大学などの共同研究の成果を盛り込んでいるが、県防災危機管理課の森主査は「シミュレータの結果は一定の前提条件を置いてのもので、この通りになるとは言えない。市が実施している無料耐震診断を、まず、受けていただきたい」と話している。

システムは昨年四月にスタート。同課では昨年未までの利用は、六万六千件に達したと推測している。

学区の避難訓練に参加しましょう！

2月22日（日）午前10時 ～ 正午

当日の行動は、各自治会の指示に従って下さい

☆訓練の流れ

自治会ごとに「避難場所」に集合する

※「避難場所」に集合しない自治会は、直接「避難所」に集合する



自治会ごとにまとまって

「避難所」平和が丘小学校へ

※東邦高校とコミセンは除く



☆意見交換会（反省会）

学連協の指導によって進める

☆ご注意

- ①寒くないよう注意してください。
- ②飲み水、甘味料、タオル、ティッシュ、筆記用具などを持参してください。
- ③活動しやすい服装（とくに、はき物）で参加してください

☆訓練中の作業

⇒ 全世帯の安否を確認する

- ①組長・前年度組長・自主防災会役員が「安否確認票」を利用して行う
- ②自治会長に報告する。要救出者のある場合は、自治会長の指示に従う

⇒ 自治会ごとに避難者名簿を作成する

正副自治会長を中心に「安否確認票」を利用して行う

※ 安否確認作業・避難者名簿作成とも「防災あんしん調査票」を使うのが原則だが、今回は訓練なので「安否確認票」を使用する

防災訓練に参加して… その体験から

連帯が深まりました

無職 西岡洋任 74

四日市市

先日、地区の防災協議会主催の

防災訓練に参加した。早朝から小学校の運動場に、低学年の小学生から高齢者まで、多くの男女が集まった。

まず、消防団の方から三角布の使い方や竹と毛布でのタンカ作り方などの指導。続く救助訓練で体験できた。助けを求める「大声

（平成二〇年一〇月二九日付け朝日新聞・要約）

コンテスト」もあり、子どもたちの大きな声が大空に響いた。

子どもたちが押すりヤカーでゴールインするお年寄りの笑顔が印象的だった。

お互いに知らない住民が増えて連帯感が薄くなったと言われる。今、防災訓練を通じて自助・共助の意識が芽生えるなら嬉しいことと感じました。

大勢の民生委員諸姉が調理された非常食も試食し、さわやかな気持ちで家路につきました。

体験して分かった 防災に必要な動き

税理士 滝口由美子 53

さいたま市

先日、地域の防災訓練に参加した。

煙の体験では長さ二〜三mのテントの中を通り抜けるのさえ困難で、起震車による「震度7」の体験ではすべての人や物がジャンプして怖かった。

中華なべからの火災を濡れた布で消すのも、見るとやるとでは大違い。実際に火の前に立つと、とても怖い。AED（自動体外式除

細動器）の使い方も教えてもらった。

訓練には、自治会の班長に当たっているため義務感から参加したようなものだが、行ってよかったですと実感している。

いざ！ という時の行動は、実際にやってみるとよく分かる。いや、やってみないと分からない。秋の一日、貴重な体験だった。

（平成二〇年一〇月一六日付け読売新聞・要約）

編集後記

木村 元三郎

石川県の旧門前町の「高齢者マップ」。三者が共有しているとのこと。個人情報をおられることに感謝しました。